

望ましい教育環境の あり方について(答申)

平成30年12月20日

牧之原市教育のあり方検討委員会

目 次

1	検討の目的	…	1
2	検討の背景	…	1～2
3	牧之原市が目指す教育の基本的な考え方	…	2
4	実現のための具体的な方策	…	4～7
5	結び	…	7

資料編 資料 1～11

1 検討の目的

牧之原市教育のあり方検討委員会では、市教育委員会から諮問された、「今後の牧之原市を見据えた望ましい教育環境の方向性と具体案」について検討し、まとめることを目的としている（資料1～3）。

2 検討の背景

（1）牧之原市での検討経緯

平成27年度に策定された第2次牧之原市総合計画では、「若者が魅力を感じる教育環境の実現」、教育大綱では、「子どもたちが学びやすい環境を整えるため小学校の規模と配置の適正化を図る」こと、さらには、平成28年11月に策定された「牧之原市公共施設マネジメント基本計画」の方針では、「小中連携教育を進め、魅力ある教育環境を実現するため、小中学校再編計画を策定する」ことが謳われている。この課題に対応しながらも、「自立した人間として、主体的に判断し、多様な人々と協働しながら新たな価値を創造する人材の育成（※1）」や牧之原市教育大綱の理念である「こころざしを持ち 夢ある人づくり」を実現するための教育環境は何かを明確にすることが求められている。

（2）社会情勢と教育改革の動向

これからの社会では、AI（人工知能）などの技術革新により、コンピューターがさらに活用されることで、今ある職業の多くがなくなると言われている。日本はすでに人口が減少する社会に突入し、少子化がさらに進行する一方で「人生100年時代」の到来により、人々のライフスタイルが大きく変わろうとしている。身近なところに目を移せば、家庭の所得、習慣の違いから教育への考え方にも多様性が顕著になりつつある。グローバル化がさらに進展する中で、雇用や情報の場が広がり、多様な言語、文化及び特性を持つ人やものなどに会う機会はますます増加していくと予想される。

上記のような変化する社会情勢に対応するために、文部科学省は、第3次教育振興基本計画や新学習指導要領等の整備等により教育改革を進めてきている。戦後からほとんど変わることなく続いてきた義務教育制度のあり方についても、平成28年4月1日「学校教育法等の一部を改正する法律」により義務教育学校（※2）の設置が可能となり、市町村が義務教育の在り方をデザインすることが可能になった。

牧之原市でも人口減少が続いている状況であり、2030年には児童生徒数が

※1 平成30年6月15日に閣議決定された「第3期教育振興基本計画」の2030年以降の社会像の展望を踏まえた個人と社会の目指すべき姿からの抜粋。

※2 平成28年4月1日、「学校教育法等の一部を改正する法律」により新たな種類の学校として認められた、現行の小中学校に加えて小学校から中学校までの義務教育を一貫して行うことができる学校。

現在の約半分になることが予測されており、各学校の小規模化が一層進むことになる。他方、発達支援や日本語指導が必要な児童・生徒など学校での対応が多様化・複雑化していく中で、すべての子どもたちが公平に教育を受ける環境を整備することが必要となっている。また、数年後には築50年を経過する校舎が大半となる。津波浸水区域に建っている学校もあることから、東海地震等への対応としても学校の立地について検討することが急務である（資料4, 5）。

（3）子どもを取り巻く状況

全国的な傾向として、小学校6年生から中学校1年生になるときに、いじめの認知件数、不登校等の発生件数が増加しており（※3）、牧之原市においても不登校では同様の傾向が見られる。また昔と比べて子どもの成長が2年程度早まっていることなどが確認されている（資料6）。検討の中では、状況の整理をしたところ、次のような傾向が指摘された。

全国学力・学習調査等における学力は、全国平均とほぼ同等であるが、家庭での学習時間が少なくなっている。自己肯定感は全国平均より高いが、外部との関わり方を見ると、たくましさや、やり抜く力をさらに育てる必要があると感じられる。学校と地域との関わり方の度合いも全国平均より高いが、地域差があることや「牧之原市」としての一体感を醸成する必要がある。また、子どもが少人数であれば教員の眼が届きやすい反面、人間関係の固定化や学習内容に応じた規模の活動が難しいという面もある。その他、子どもの育ちについて学校が担う範囲が広くなりすぎ、教職員の多忙化の一因となっていることや、施設や機器の老朽化など学ぶ環境にも多くの課題がある（資料7, 8）。

3 牧之原市が目指す教育の基本的な考え方

（1）子どもにつけたい力を「次代を切り拓く力」とする。

これからの変化が激しい社会の中で、子どもが自立し、主体的に社会を生き抜くことができる人間力を身につけていく必要がある。

心身のたくましさや思いやりの心など人が生きていく上で大切な部分を「生きる力の基礎・基本」とし、学びの土台とする。子どもには、さまざまな人・もの・ことに触れ、多様性を受け入れるとともに、自分で新しい考え方やアイデアを生み出し、主体的に行動できるようになってほしい。それが、どんな時代にあっても自分の未来を切り拓く力となる。

義務教育9年間の学びを系統立てたものとし、社会を生き抜くために必

※3 小学校から中学校に進学した際に、不登校やいじめの増加等の問題が生じることを、中1ギャップという。

要な力をつけることができるようにするべきである。子どものうちから常に現実の社会と相互にやり取りをし、本物に触れる機会や実体験を通して学ぶことが大切である。

(2) 学びのプロセスと基本姿勢 (資料9)

次代を切り拓く力をつけるため、「学び、創造し、活用する」のサイクルをまわす必要がある。知識・技能を身に付け、多様な人・こと・ものと触れ合うことにより、新たな発想や気づきが生まれ、人との関わり方を学んだり、自分の個性を見つけたりすることができるようになる。そして、自分が学んだことを社会で実際にやってみることにより、社会的に自立した人に成長することができると思う。

① 学びのプロセス

「学ぶ」…これからの時代に必要な力や地域への愛着・誇りを育む。

- 基礎的な知識・技能：基礎的な知識・技能を習得する。
- 多様性を受容する力：さまざまな価値観や文化があることを理解し、受け入れることができる。(自己理解が前提にあり。)

「創造する」…多様なものをつながる中で新しい価値を生み出し、未来を描く。

- 創り出す力：新しい考えやアイデアを創り出し、新たな価値を生み出すことができる。
- 課題発見・解決力：疑問を持ち、自分自身で考え、他者と協働し、解決に向けて行動することができる。
- コミュニケーション力：相互に思いや考えを伝え合い、共感しながら、よりよい関係を築くことができる。

「活用する」…自分が学習したことや得た情報、生み出したアイデア等を実社会や自分の将来に活かすことができる。

- 活用力：学んだことや考えたことを実社会で試すことができる。

② 学びの基本姿勢

上記の学びのプロセスを「対話、協働、体験」を通して行うことにより、より深い学びにすることができる。

「対話」…牧之原市では、これまで「対話によるまちづくり」を進めてきた。多様な人と聴き合うことを通じて、参加者が主体的になり、新たな学びや気づきが生まれる。

対話とは、相手と聴き合う中で、互いに「違い」を認め、受け入れることから始まる。違いを認め合うと、いろいろな視点や考え方があることが分かり、さまざまな課題を解決したり、新しいアイデアを生み出したりすることにつながる。さらに、アイデアを具体的な計画として練り上げ、多くの協力者を巻き込んで実行することも対話によってできることである。このような力を持つ対話を通じた学びを進めていく。

「体験」…子どもたちにとって、「実際にやってみる」ということは、言葉で教わる何倍もの価値があるものである。

実際に体験・行動する中で、気づきや興味が生まれたり、自分の特性や可能性に気づくことができたりする。また、成功の達成感・満足感を味わうこともでき、さらに、思うようにいかないことに直面すること、そしてそれをどうしたら解決・改善することができるかを考え、実行する体験は、子どもたちを大きく成長させるものとなる。社会とつながり、学んだことを実際に社会で実行する機会をつくっていく。

「協働」…子どもたちに豊かな学びの環境を提供するためには、社会とのつながりや多様な人との協働が求められる。

社会とつながり、学びを活かすことにより社会的に自立した人に成長することができる考える。

学校同士、学校と地域、学校と企業、地域と企業等、子どもの学びを豊かにするためにさまざまな連携や協働を進めていく。

4 実現のための具体的な方策

「次代を切り拓く力を育むために、キャリア教育を軸にした小中一貫教育と社会全体で子どもを育てる仕組みづくりが必要である。」

子どもたちが「次代を切り拓く力」を身につけるためには、学校にいるうちから、学んだことを実社会で活かし、多様な人・こと・ものに触れることができる環境が必要である。そのために、以下5つの方策を提案する。

(1) 「主体性」を重視した個の育成～キャリア教育の推進～ (資料10)

次代を切り拓く力をつけるための手法として有効であるのが、「キャリア教育」だと考える。キャリア教育とは、自分の「生き方」を学ぶなかで、将来の目標を立て、社会で生きていくために必要な力をつけるものである。

まずは、自分の良さを見つけること、聞くことや話すことができるようにし、「自分のよさを見つけ発信する力」をつけることが大切である。そして、自分がどのような人生を送りたいのか、自分の将来に必要な力は何なのかということを考え、必要な力を段階的に身に付けることで、社会で自立した人間としてたくましく生きていくことができると考える。すべての子どもたちが公平な教育を受けることを保障するためには個に応じた指導が不可欠であり、そのためにもキャリア教育を市の学びの軸として進めていただきたい。

さらに、キャリア教育では、自己の確立や自分の将来を考えることだけではなく、課題発見・解決のプロセスも学びの一つと捉えている。

キャリア教育は、社会とのつながりの中で行ってこそ、実のあるものとなるため、実施にあたっては、地域・企業と協働して進めていただきたい。また、協働するには、後述のコミュニティ・スクールの仕組みを活用することが望まれる。

(2) 「多様性」を尊重した集団生活の重視～小中一貫教育の実現～ (資料10)

子どもは、集団活動により、自分とは異なる考えの仲間に触れ合う中で、自分の生き方を見つけることができるようになる。

多様性のある集団活動を可能にし、9年間の系統立てた教育をデザインすることができる手法として小中一貫教育がある。キャリア教育を進める上で、縦のつながりを持ち、9年間を通した学びや指導が行えることは重要である。さらに、小中一貫教育を行うことで、中1ギャップへの対応ができるとともに、専門性が必要となる小学校高学年の教科を中学校の専門教員が教えることができるなど、小中一貫教育の有効性について視察を通して確認した。その環境の中で市の子どもたちを育てていただきたいため、義務教育学校も含め、9年間を通した学びの形や取組を考えるとともに、その効果を検証する体制を整えることを提案する。

また、保育・幼稚園及び高校との接続についても併せて考える必要がある。

(3) 社会全体で育てる仕組みの構築～コミュニティ・スクールの導入～ (資料10)

本市には、地域の人たちが小中学校に深く関わり、子どもたちも地域で活発に活動をしているという特徴がある。これを発展させ、さらに連携できるようにするためには、学校と地域・企業が協働する仕組みである「コミュニティ・スクール」を活用することが有効である。(※4)

コミュニティ・スクールは、学校がつくったカリキュラムを承認し、地域と学校が、目標を共有して活動をするというものである。学校がやるべきことと地域がやるべきことに、それぞれが主体性を持って取り組み、必要に応

※4 平成29年3月「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の一部が改正され、設置が努力義務化されている。

じて協働し、それを自分たちが総合的に評価し、改善していく役割を持つものである。

コミュニティ・スクールは、小中一貫教育とセットとして考え、将来的には中学校区ごとに設置することを視野に、試行・検討をして牧之原市に相応しいコミュニティ・スクールの体制を構築されたい。

(4) 魅力ある学校施設

学校施設は、安心・安全で、学びやすく、通いたい・通わせたいと思える施設でなければならない。そのために、以下の4つの視点を提案する。

● 人と物を集中して教育活動を充実させる

将来の児童生徒数の推移から、複数学級を維持するには、学校を集約する必要がある。多様な意見や機会に触れるためには、ある程度の人数が必要であるため、学校の規模を考える際は、クラス替えができることを要件にすべきである。複数の学級があることで、子どもが多様性に触れる機会や新たな創造を生む機会を増やすことができると考える。

さらに、集約することにより人や物を集中し、ICT環境の充実など時代に合った施設・設備とするとともに、きめ細やかな対応ができるよう教員以外の専門スタッフの配置や教員業務の改善を図り、教育活動が充実することを求める。なお、教科等の特性に応じて少人数指導を導入するなど、小規模校の「良さ」を継承していくことも検討していただきたい。

● 交流ができる場をつくる

学校施設の一部又は隣接した場所に、地域の人が活動できる場をつくらせていただきたい。これにより多様な触れ合いやコミュニケーションが生まれ、教育内容の充実だけでなく、子どもにも地域の人にも、「この学校に通いたい・通わせたい」と思ってもらえるような愛される学びの場となることが期待できる。

● まちづくりの視点で考える

小中学校を一体型又は隣接した施設にすることや、図書館、プール等の市民との供用、学校施設中に地域の活動の場を設ける等、学校施設の複合化や周辺に公共施設を整備し共有することにより、人づくりや文化の拠点としての機能を持つことを望む。

機能を集中することにより、人の流れをつくることができる。そのためには、スクールバスやコミュニティバスなどの交通ネットワークの整

備や、人が集まりやすい機能の充実など、まちづくりと合わせて考えていくことは重要である。

● 安心・安全な学校とする

新しい学校施設には、安心・安全の確保を強く求める。学校施設は、津波浸水区域外に建て、防災機能の充実した施設とされたい。また、ユニバーサルデザインや環境に配慮することも大切である。

さらには、子どもの安心・安全のためには、防災教育や食育も併せて行うことが必要である。

(5) 実施時期

2030年完全実施を目指し(※5)、できる限り早い時期に整備する

市民だけでなく、市外の人にも魅力と感じ、「牧之原市の教育を受けたい・受けさせたい」と思い牧之原市に来てもらえるように、前述の望ましい教育環境をできる限り早く実現すべきである。

施設に関しては、2030年整備完了を目指し、できる限り早い時期とし、キャリア教育を軸とした小中一貫教育やコミュニティ・スクールについては、早急に実施されたい。

5 結び

今回答申する「望ましい教育環境」の実現に向けて、プログラムや仕組づくり等の検討及び試行、各種調整等が必要である。検討に当たっては、常に、子どもの学びや育ちを中心に考えるとともに、着実かつ速やかに検討することが大切である。そのために必要なスタッフを置き、適切な実施体制を構築することを求める。検討は迅速に行うべきであるが、時代の変化が激しいため、常に、学び、見直しながら進め、その時点で最適と考えられるものをつくっていただきたい。

さらに、この実現については、教育委員会と首長部局が連携を図りながら、学校、地域、保護者、そして企業、それぞれが主体的に考え、関わるができるよう、関係する者が対話をしながら進めることも大切である。

また、学校組合の扱いについては、関係市町と調整を進められたい。

※5 第3次牧之原市総合計画の計画終了予定時期。

資料編

- 資料 1 望ましい教育環境のあり方について（諮問）
- 資料 2 牧之原市教育のあり方検討員会条例
- 資料 3 牧之原市教育のあり方検討委員名簿及び検討経過
- 資料 4 学校施設について
- 資料 5 児童生徒数と学校規模について
- 資料 6 子どもの生徒指導面及び身体面の状況
- 資料 7 市の子どもを取り巻く状況（委員の発言まとめ）
- 資料 8 牧之原の子どもたちの学力・学習の様子
- 資料 9 基本理念実現のための9年間の連続した学び
- 資料 10 次代を切り拓く力をつけるための体制・仕組み
- 資料 11 牧之原市教育のあり方検討意見交換会の概要と
意見のまとめ

牧教第 171 号
平成 30 年 2 月 1 日

牧之原市教育のあり方検討委員会委員長 様

牧之原市教育委員会
教育長 坪池



望ましい教育環境のあり方について（諮問）

今後の牧之原市にとって望ましい教育環境を明らかにするために、牧之原市教育のあり方検討委員会条例（平成 29 年条例 26 号）第 2 条第 1 項の規定により、下記の事項について諮問します。

記

- 1 諮問する項目
今後の牧之原市を見据えた、望ましい教育環境の方向性と具体案。
- 2 答申にあたっての留意点
多様な市民の意見を反映し、人々が魅力を感じる教育環境や、地域と学校の関わりについて検討すること。

○牧之原市教育のあり方検討委員会条例

平成29年12月22日
条例第26号

(設置)

第1条 牧之原市の魅力ある教育環境の実現のため、地方自治法（昭和22年法律第67号）第138条の4第3項の規定に基づき、牧之原市教育のあり方検討委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(所掌事務)

第2条 委員会は、教育委員会の諮問に応じて、市の教育のあり方の方針に関し必要な事項について調査審議し、意見を答申する。

(組織)

第3条 委員会は、委員10人以内で組織する。

2 委員は、次に掲げる者のうちから、教育長が委嘱する。

(1) 学識経験を有する者

(2) 学校関係者

(3) 幼稚園、保育園、認定こども園、小学校又は中学校に在籍する者の保護者

(4) 事業者

(5) 公募による者

3 委員の任期は、委嘱の日から平成31年3月31日までとする。

(委員長及び副委員長)

第4条 委員会に委員長及び副委員長を置き、委員の互選によりこれを定める。

2 委員長は、会務を総理し、委員会を代表する。

3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき、又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

(会議)

第5条 委員会の会議（以下「会議」という。）は、委員長が招集し、その議長となる。

2 会議は、委員の過半数の出席がなければ開くことができない。

3 会議の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

4 議長は、必要があると認めるときは、会議に委員以外の者の出席を求め、説明又は意見を聴くことができる。

(庶務)

第6条 委員会の庶務は、教育委員会事務局において処理する。

(委任)

第7条 この条例に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、教育長が別に定める。

附 則

(施行期日)

1 この条例は、公布の日から施行する。

(最初の会議の招集)

2 この条例の施行後最初に行われる委員会は、第5条第1項の規定にかかわ

らず、教育長がこれを招集する。

(この条例の失効)

3 この条例は、平成31年3月31日限り、その効力を失う。

牧之原市教育のあり方検討委員名簿及び検討経過

■ 牧之原市教育のあり方検討委員名簿

	氏名	分類	職業
1	島田 桂吾	学識経験を有する者	静岡大学教育学部講師
2	加藤 百合子	学識経験を有する者	(株)M2lab代表取締役社長 テラスマイル(株)取締役 信州大学客員教授、新静岡学園理事
3	野村 智子	学校関係者	小学校教諭
4	佐藤 利彦	学校関係者	中学校教諭
5	池ヶ谷 祐太	保護者	就学前児保護者
6	橋山 妙子	保護者	小学校保護者
7	大石 斉	事業者	矢崎部品(株) ものづくりセンター
8	今野 英明	事業者	光誠工業(株)
9	中島 佑実	公募による者	保育教諭
10	石井 眞澄	公募による者	医師

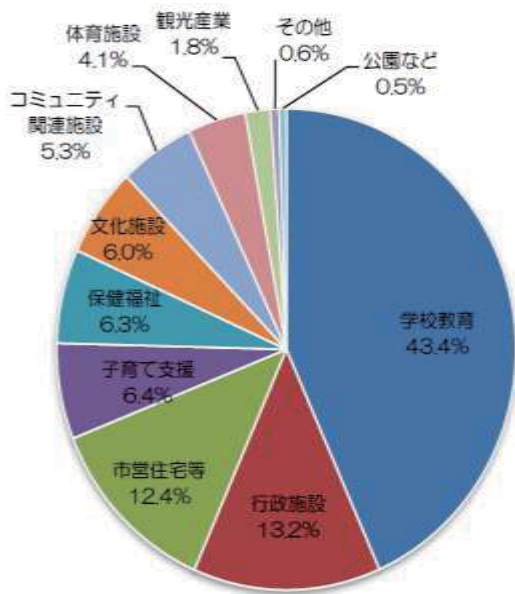
■ 牧之原市教育のあり方検討委員会経過

会議等	開催日時	内容
第1回	平成 30 年 2 月 1 日	○諮問・委員委嘱 ○教育内容「子どもにつけたい力」
第2回	平成 30 年 3 月 5 日	○教育内容「子どもにつけたい力」
第3回	平成 30 年 4 月 18 日	○教育内容を実現するための体制
研修会	平成 30 年 5 月 16 日	講師：島根県雲南市教育委員会職員 「キャリア教育を柱とした雲南市の教育」
視察研修	平成 30 年 7 月 4 日 ～5 日	小中一貫教育・複合施設の視察 ①京都市立東山泉小中学校 ②京都教育大学附属京都小中学校 ③愛知県海部郡飛島村立飛島学園
第4回	平成 30 年 7 月 25 日	○教育内容を実現するための体制・施設設備
第5回	平成 30 年 8 月 21 日	○施設設備・規模・時期
意見 交換会	平成 30 年 10 月2日 10 月4日	榛原文化センター、市史料館で開催 参加者：自治会役員、幼保こども園・小中学校保護者・教職員・高校生等計 79 人
第6回	平成 30 年 11 月 22 日	○答申書まとめ
答申	平成 30 年 12 月 20 日	答申報告会 ○答申 ○講演会 講師：京都市立東山泉小中学校長 「(仮題)小中一貫教育とその効果」

学校施設について

1 市の公共施設の状況

《 施設用途別の建物延床面積の内訳 》



《 施設用途別の保有状況 》

施設分類	施設数	建物数	延床面積	面積割合
学校教育施設	12	129棟	65,911.5㎡	43.4%
行政施設	35	56棟	20,077.5㎡	13.2%
市営住宅等施設	19	93棟	18,843.1㎡	12.4%
子育て支援施設	13	14棟	9,796.7㎡	6.4%
保健福祉施設	12	15棟	9,623.4㎡	6.3%
文化施設	4	5棟	9,127.3㎡	6.0%
コミュニティ関連	11	11棟	8,059.9㎡	5.3%
体育施設	8	14棟	6,195.5㎡	4.1%
観光産業振興施設	8	10棟	2,690.4㎡	1.8%
その他施設	13	13棟	908.5㎡	0.6%
公園など	19	29棟	770.1㎡	0.5%
施設合計	154	389棟	152,003.9㎡	100%

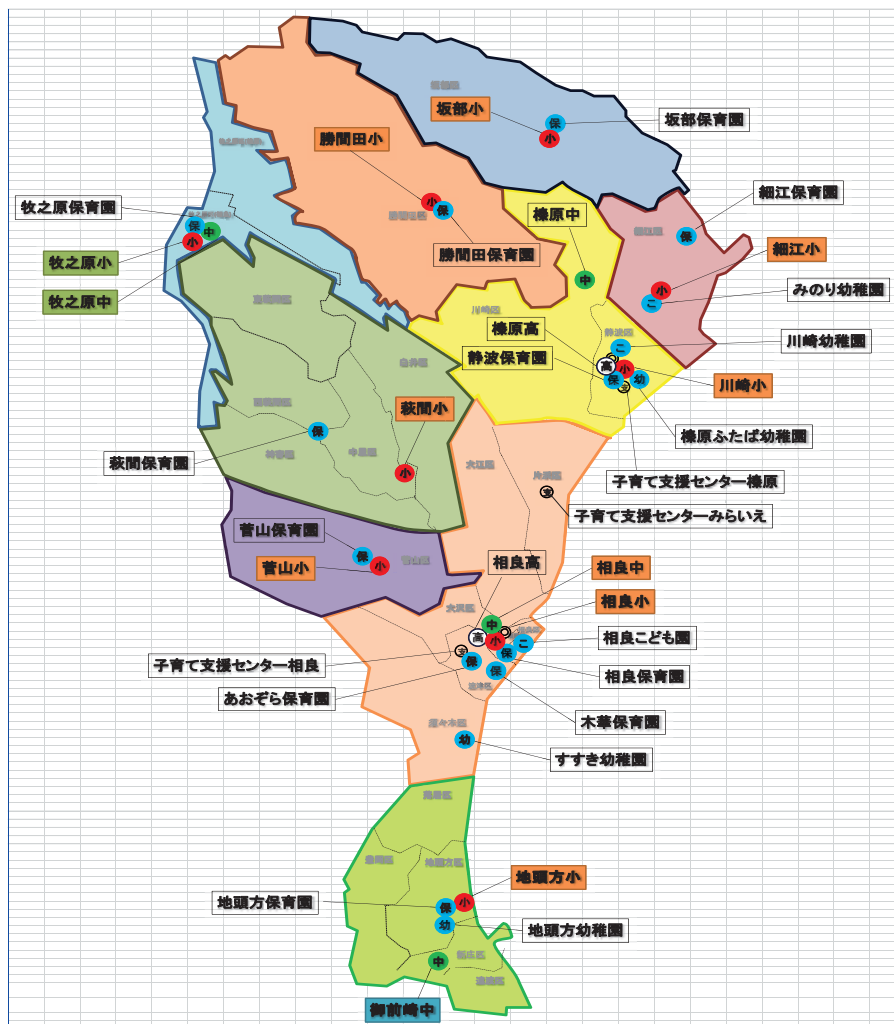
2 牧之原市の子どもが通っている学校

小学校 (9校)	学校名
	相良小学校
	菅山小学校
	萩間小学校
	地頭方小学校
	川崎小学校
	細江小学校
	勝間田小学校
	坂部小学校
	牧之原小学校 ■

中学校 (4校)	学校名
	相良中学校
	榛原中学校
	牧之原中学校 ■
	御前崎中学校 ◇

- 牧之原市菊川市学校組合で運営をしており、管理者は牧之原市。
- ◇ 御前崎市牧之原市学校組合で運営をしており、管理者は御前崎市。

3 学校等の位置



4 学校施設の建築年数

	学校名	延床面積 (㎡) ※1	建築年 ※2	築年数 ※3
1	相良小学校	8,304	昭和48年3月	45
2	菅山小学校	3,803	昭和56年3月	37
3	萩間小学校	3,610	昭和40年11月	53
4	地頭方小学校	4,599	昭和40年3月	53
5	川崎小学校	6,536	昭和43年3月	50
6	細江小学校	5,934	昭和45年3月	48
7	勝間田小学校	3,579	昭和39年3月	54
8	坂部小学校	3,211	昭和37年8月	56
9	相良中学校	10,496	昭和50年8月	43
10	榎原中学校	10,678	昭和47年3月	46
11	牧之原小学校	3,967	昭和45年3月	48
12	牧之原中学校	4,592	昭和53年1月	40

※1 学校が所有する建築物の合計

※2 主な校舎の建築年数

※3 2018年度時点

児童生徒数と学級規模について

1 児童生徒数（平成30年5月1日）

設置者	学校名	人数	備考
牧之原市	相良小学校	526人	
	菅山小学校	148人	
	萩間小学校	129人	
	地頭方小学校	207人	
	川崎小学校	439人	
	細江小学校	448人	
	勝間田小学校	140人	
	坂部小学校	107人	
	相良中学校	419人	
	榛原中学校	543人	
牧之原市菊川市学校組合	牧之原小学校	170人	牧之原市 145人
	牧之原中学校	55人	牧之原市 41人
御前崎市牧之原市学校組合	御前崎中学校	387人	牧之原市 113人

2 学校規模

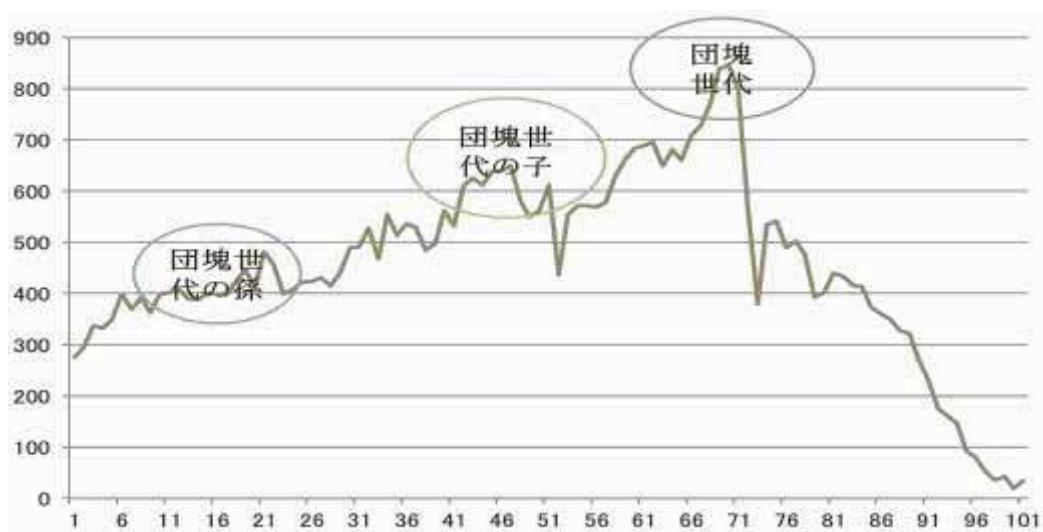
牧之原市が管理者の学校12校の状況

- 小規模校 7校（菅山小・萩間小・地頭方小・勝間田小・坂部小・牧之原小・牧之原中）
- 適正規模校 5校（相良小・川崎小・細江小・相良中・榛原中）

参考：学校数による学校規模分類（公立小・中学校の国庫負担事業認定申請の手引き）

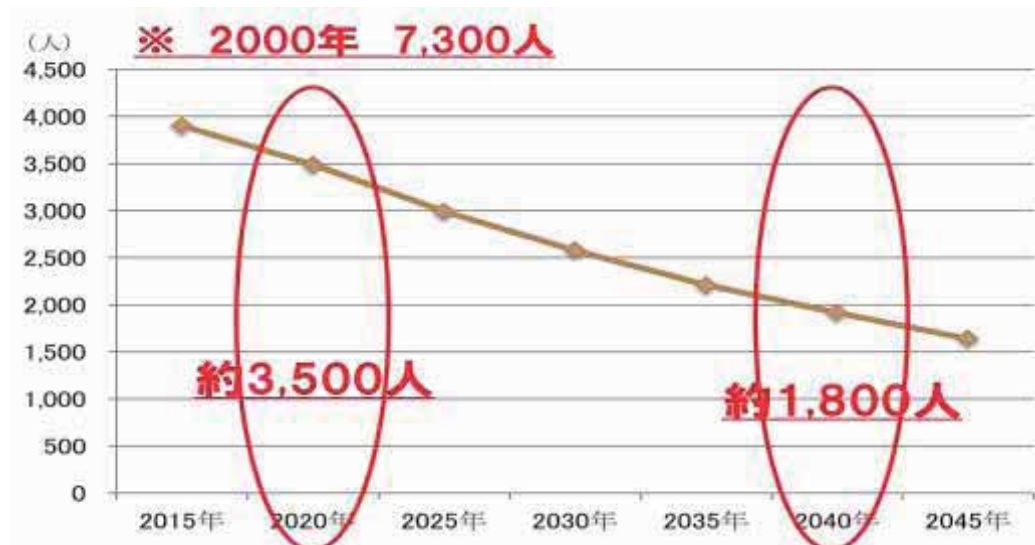
分類	過小規模	小規模	適正規模	大規模	過大規模
小学校学級数	1～5	6～11	12～18	19～30	31以上
中学校学級数	1～2	3～11			

3 牧之原市の年齢別人口（市住民基本台帳 2018. 3. 31 現在）



4 牧之原市の5～14歳の人口予測

（国立社会保障人口問題研究所 2018. 3. 30 発表地域別将来推計人口からの抜粋）



5 将来の小学生数と1学年の学級数（35人学級換算）牧之原小には菊川市児童舎

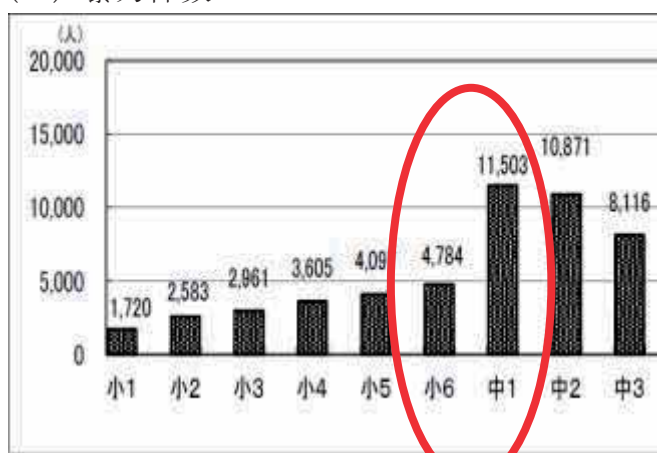
小学生数	2030年	2035年	2040年	2045年
相中学区	562人 2.7組	481人 2.3組	418人 2.0組	357人 1.7組
御中学区	150人 0.7組	129人 0.6組	112人 0.5組	96人 0.5組
榛中学区	755人 3.6組	648人 3.1組	562人 2.7組	480人 2.3組
牧中学区	102人 0.5組	87人 0.4組	76人 0.4組	65人 0.3組
計	1569人 7.5組	1345人 6.4組	1168人 5.6組	998人 4.8組

子どもの生徒指導面及び身体面の状況

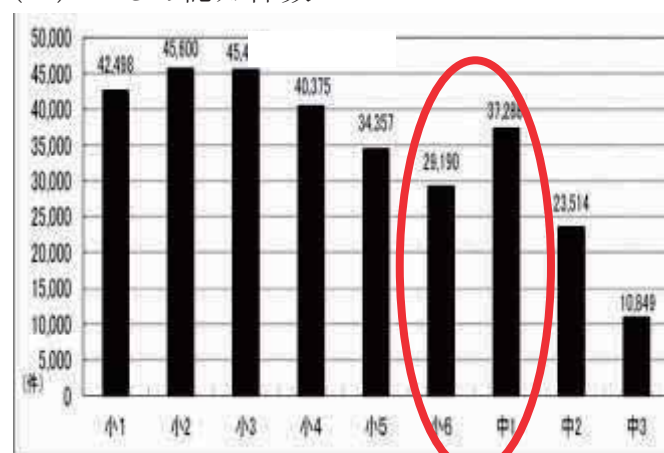
1 中1ギャップ（小学校6年生⇒中学校1年生）【生徒指導面】

出典：平成28年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（確定値）について（H30.2.23 文部科学省初等中等教育局児童生徒課）

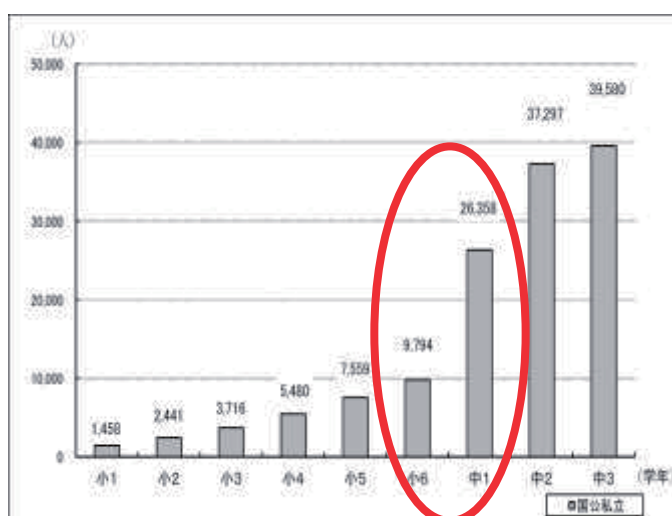
(1) 暴力件数



(2) いじめ認知件数



(3) 不登校件数



2 小学校と中学校の違い

主な内容	小学校	中学校
指導体制	学校担任制	教科担任制
指導方法	日常生活に根差した比較的きめ細やかな指導	比較的抽象度の高い内容を含めた指導
家庭学習	宿題の教科間の調整がされやすい	宿題の教科間の調整がされにくい、部活動との両立が必要となる
試験等	定期試験は実施されない	定期試験が実施され、小学校よりも試験に向けた計画的な学習が必要になる
児童生徒指導	学級担任を中心に児童の心理的な状況と行動の実態を十分把握しながら、模範意識の醸成を図る指導	中学生の特徴と思春期の理解を基本とした規範意識を育成する指導
部活動等	学校の教育活動の一環としての部活動はなく、スポーツ少年団等にここで参加する活動が主体	学校の教育活動の一環として部活動が行われ、活動を大増羽機会の増加、先輩・後輩の上下関係が人間関係に占める割合が高まる場合あり

3 小学校高学年の子どもの状況

昭和 20 年代と比べて、2 年ほど成長が早まっている。

項目	状況
小学校高学年段階の児童の身体発達	<ul style="list-style-type: none">平均身長や体重が大きく増加女子の平均初潮時期
児童生徒指導面	<ul style="list-style-type: none">自己肯定感や自尊感情に対して、急に否定的になる傾向がある。不登校や長期欠席が増えている。
学習面	<ul style="list-style-type: none">「学校の楽しさ」、「教科や活動の時間の好き嫌い」について、肯定的回答をする児童の割合が下がる。経験的な理解で対応できる学習から、理論・抽象的な理解が必要な学習内容へ移行段階でのつまずきにより中学校の学習への支障をきたしている。

牧之原市の子どもを取り巻く状況（委員の発言まとめ）

資料7

分類	現状と優れている点	課題がある点	課題解決の方向性	有効と思われる施策
学力	<ul style="list-style-type: none"> 学力が全国平均とほぼ同等 	<ul style="list-style-type: none"> 学ぶ環境が家庭によって差がある。（家庭での学習時間が少ない） 	<ul style="list-style-type: none"> 放課後や休日の学習環境の整備 個に応じた学習支援 	<ul style="list-style-type: none"> 9年間を通じた学びのカリキュラム コミュニティスクール（地域学校協働活動含む。以下同様） スクールサポートスタッフの充実（外国人・特別支援等含む。以下同様） 放課後子ども教室
子どもの状況	<ul style="list-style-type: none"> 自己肯定感が全国平均より高い。 安定した学校生活 外国人児童生徒の増加 	<ul style="list-style-type: none"> 学校や家庭で子どもを見ている者の実感として、たくましさがないと感じる。 価値の多様化に対応できるようにしたい。 もともと自己肯定感を高めたい。 中学校で不登校増加 外国人の増加によりコミュニケーションがとりづらい。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校内外で多様な人・物・ことに触れる学習。 	<ul style="list-style-type: none"> キャリア教育（自分の生き方を見据える。たくましさややり抜く力を育てる） スクールサポートスタッフの充実
地域と連携した学び	<ul style="list-style-type: none"> 小中学校はキャリア教育を進めたい。 企業は社会貢献の立場からも子どもへの学びに関わりたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校は、企業へのつてがない。 企業は関わり方が分からなく、現在は学校と関わりが薄い。 	<ul style="list-style-type: none"> 教育課程内外で本物に触れる機会をつくる。（聴く・見る・体験する） 	<ul style="list-style-type: none"> キャリア教育 コミュニティスクール
学校規模	<ul style="list-style-type: none"> 地域との関わりが全国平均より高い 歴史・文化がある。（田沼意次生誕300年など） さまざまなボランティアによる支援（多くの人が学びを支えてくれている） 	<ul style="list-style-type: none"> 地域の学校への関わり方は、地域によって差がある。 合併して10年以上経つが、相良・榛原の違いがあり、「牧之原」として1つの認識になっていない。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域に愛着を持つ学習。 「牧之原市」としての文化。 	<ul style="list-style-type: none"> 総合的な学習の時間等を活用したカリキュラム開発
学校場所	<ul style="list-style-type: none"> 少数数は教員の眼が届きやすい（生徒指導） きめ細やかな指導ができる（学習指導） 	<ul style="list-style-type: none"> 集団活動（学校行事・部活動等）の機会が少なくなる。 内容に合った最適規模（グループ、学級、学年、学校）での活動が難しい。 子どもたちの人間関係が固定化する。 単学級だと同学年を受け持つ教員同士の相談や切磋琢磨によるスキルアップが難しい。 	<ul style="list-style-type: none"> 多様性に触れる機会を多くつくる。 複数学級 	<ul style="list-style-type: none"> 1学年複数学級が実現する小中一貫校（複合化・共有化含む）
ICT機器	<ul style="list-style-type: none"> 地域に身近な学校（歩いていける距離に学校がある） 	<ul style="list-style-type: none"> 小学校3校、中学校1校は津波浸水区域にある。（人数の多い学校が海側に集中している） 雨漏り、機器の故障など施設の修繕が必要な箇所が多い。 単学級の学校が多く、将来的に複式学級となる学校があることが予測される。 	<ul style="list-style-type: none"> 集約して新しい学校をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> 1学年複数学級が実現する小中一貫校（複合化・共有化含む）
学校の状況	<ul style="list-style-type: none"> ICT機器の整備を進めている。電子黒板の普及率は県下でも高い。 	<ul style="list-style-type: none"> 無線LAN環境が整っていない。 タブレットの整備率が低い。 	<ul style="list-style-type: none"> 集約して新しい学校をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> 施設設備の充実
学校の状況	<ul style="list-style-type: none"> 学校が生活習慣等についても教えていて、いろいろなことを担っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校が担う範囲が広くなり、教職員の多忙化の一因となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 教員が教育課程及び子どもに集中できる環境をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> コミュニティスクール スクールサポートスタッフの充実

牧之原の子どもたちの学力・学習の様子

牧之原市教育委員会、牧之原市菊川市学校組合教育委員会

■ 全国学力・学習状況調査について

子どもたちの学力や学習状況を把握し、今後の教育活動の改善に役立てるために実施されるものです。



【質問紙調査】

学習意欲、生活習慣、学習の環境等についての意識調査

(A 問題) 【知識】

主として知識を問う問題

(B 問題) 【活用】

主として活用・応用に関する問題

調査の構成 3種類で構成されています

教科調査の状況

小学校	国語A (12問)	国語B (8問)	算数A (14問)	算数B (11問)	理科 (16問)
(平均正答数の全国結果との比較)	1問分低い	ほぼ同じ	ほぼ同じ	ほぼ同じ	0.5問分低い
中学校	国語A (32問)	国語B (9問)	数学A (36問)	数学B (14問)	理科 (27問)
(平均正答数の全国結果との比較)	ほぼ同じ	ほぼ同じ	0.5問分高い	ほぼ同じ	0.5問分高い

※「ほぼ同じ」とは、全国平均正答数との差が0.5問より小さいことを示す。

国 語

描写をもとに登場人物の心情を捉える「読む力」が身についています。今後は、目的に応じて文章を読み、読んで集めた材料を文章として「書く力」をつけていく必要があります。また、漢字や慣用句などを覚えるだけでなく、「言語の知識を活用できる力」を育てていきます。



算数・数学

計算や角の測り方などの技能が身につけてきています。今後は、データの特徴や傾向について多面的に考察する「データを活用する力」をつけていく必要があります。また、考えを伝え合う学習を通して、日常の事象を数理的に捉え、目的に応じて柔軟に表す力を育てていきます。



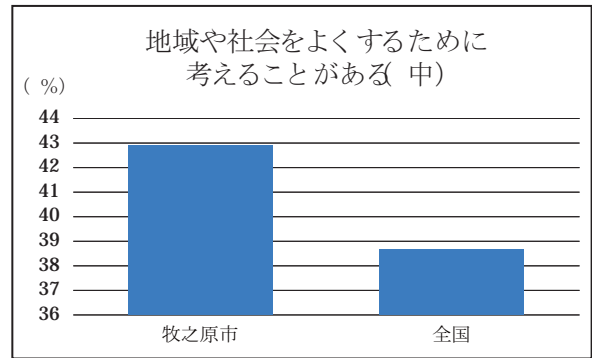
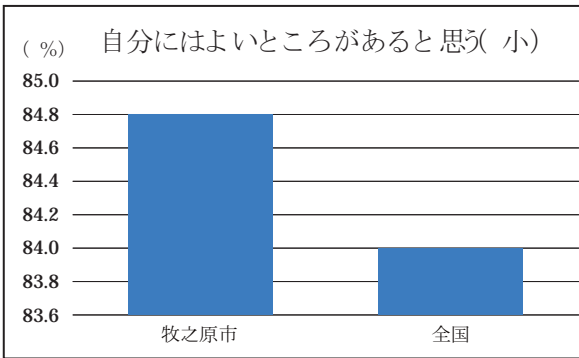
理 科

「自分の予想をもとに観察や実験を行っている」と答えた子どもの割合が多く、観察や実験を通して、科学的な思考力などが身につくにつれ、今後も、豊かな体験を大切にして、身の回りの自然事象や現象について「科学的に解決できる力」を育てていきます。



質問紙調査にみる牧之原の子どもたちのよさと課題

自己肯定感が高い



牧之原市では、教育活動全体を通して、意図的・計画的・組織的に自己肯定感を高める取組をしています。自己肯定感の高まりは、子どもたちの確かな自我を育て、全ての学びの基盤となります。また、自分も周囲も大切にして、社会に貢献しようとする心の育成にもつながっています。日々向上心をもって成長している子どもたちを、家庭、地域全体で支え、励ましていこう今後ともお願いします。

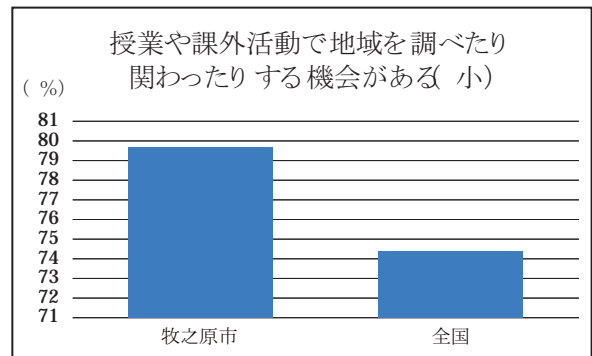


地域との連携

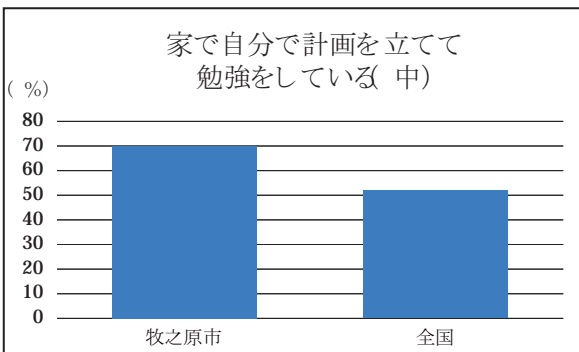
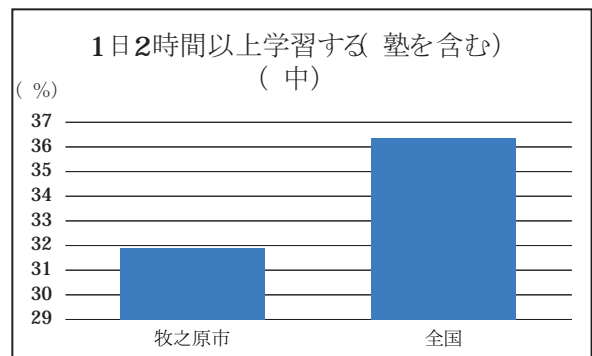
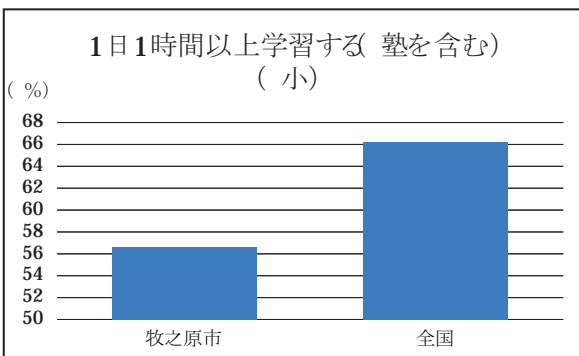
子どもたちは、体験活動を通して、地域のことをたくさん学んでいます。

地域社会と学校が連携し、協働することで、子どもたちの安定した心を育むことができます。

今後も地域のよさを知り、発信する学習を行うことで、子どもたちと地域の絆を、一層深めていきます。



家庭での時間の使い方



自分で計画を立てて学習する子どもが増えています。しかし、家庭学習の時間は全国平均と比べると少ない傾向にあります。家庭学習への主体的な取組を認め、励まして、発達段階に応じた内容の見届けや助言をお願いします。



基本理念 **こころざしを持ち 夢あるひとづくり**

次代を切り拓く力

学びのプロセス

活用する

【資質・能力】

- ・主体性
- ・実行力・行動力 等

- ・社会に活かす
- ・効果を実感する

創造する

【資質・能力】

- ・思考力、判断力、表現力等の能力
- ・課題発見・解決力等

- ・新しい価値を生み出す
- ・未来を描く

学 ぶ

- ・これからの時代に必要な力や地域への愛着や誇りを育む

【資質・能力】

- ・十分な知識・技能

多様な人との協働

協働

気づき・発見、意欲

体験

コミュニケーション力

対話

学びの基本姿勢

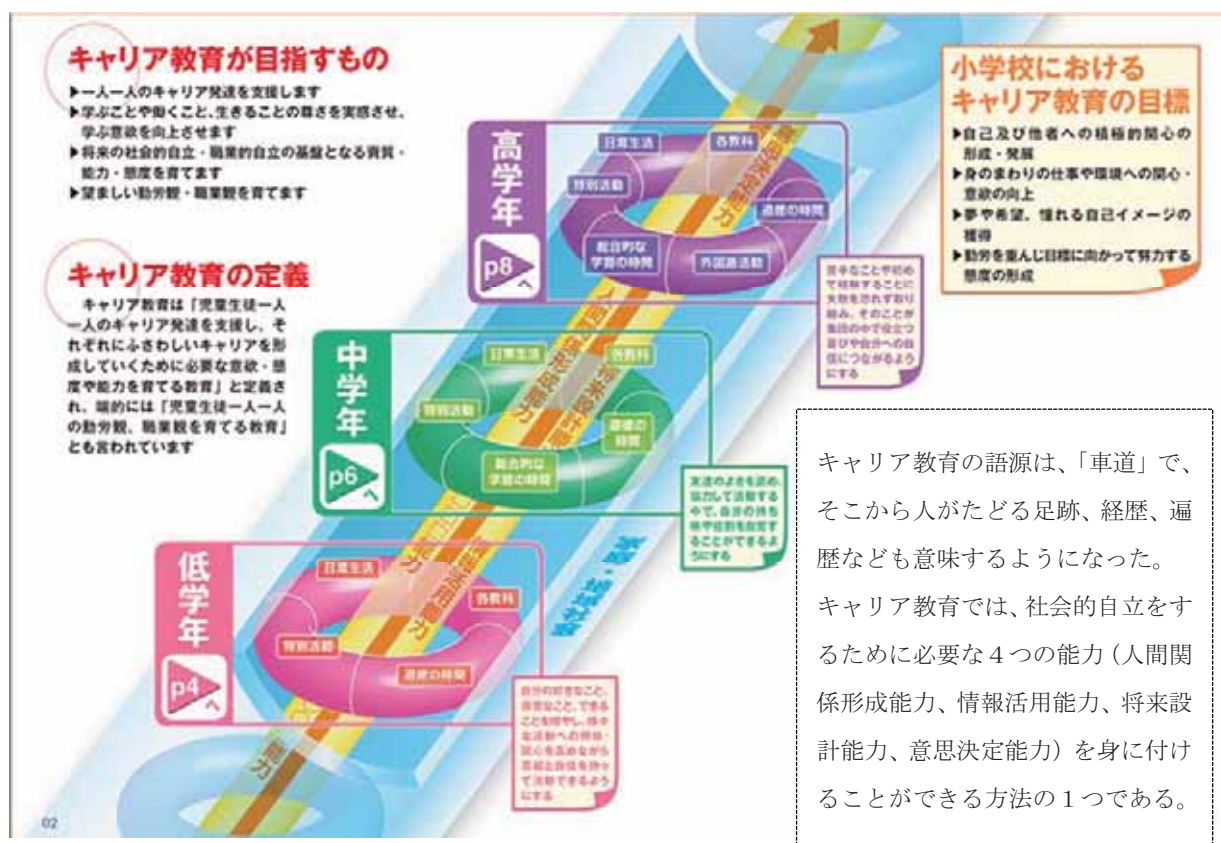
生きる力の基礎・基本

心身のたくましさ、自己肯定感や命の大切さなど、人が生きて行く上で大切な部分

次代を切り拓く力をつけるための体制・仕組み

1 キャリア教育

(1) キャリアの全体像 ※小学校におけるキャリア教育推進のために（平成21年3月）より



(2) 先進事例：島根県雲南市



2 小中一貫教育

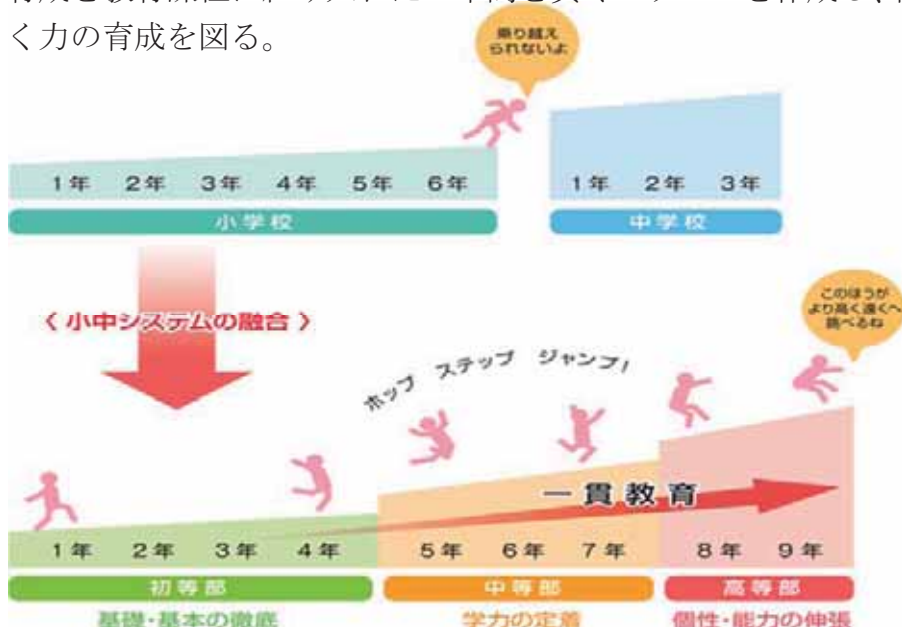
- 9年間のつながりを形態・枠の見直しを含めて考える。
- 義務教育の9年間をトータル的にデザインすることができる。

(1) 小中一貫教育の種類

(参考) 小中一貫教育に関する制度の類型			
	義務教育学校	小中一貫型小学校・中学校	
		中学校併設型小学校 小学校併設型中学校	中学校連携型小学校 小学校連携型中学校
設置者	—	同一の設置者	異なる設置者
修業年限	9年 (前期課程6年+後期課程3年)	小学校6年、中学校3年	
組織・運営	一人の校長、一つの教職員組織	それぞれの学校に校長、教職員組織	
免許	原則小学校・中学校の両免許を保有 <small>(※ 両方の免許は小学校設置免許や幼稚園免許、中学校免許などで義務課程の取得が可能)</small>	所属する学校の免許状を保有していること	
教育課程	・9年間の教育目標の設定 ・9年間の系統性・体系性に配慮がなされている教育課程の編成		
	一貫教育に 必要な教育 課程の設定	○	○
指導内容の 入替え・移行	○	○	×
施設形態	施設一併型・施設隣接型・施設分離型		
設置基準	前期課程は小学校設置基準、 後期課程は中学校設置基準を準用	小学校には小学校設置基準、中学校には中学校設置基準を適用	
標準規模	18学級以上27学級以下	小学校、中学校それぞれ12学級以上18学級以下	
通学距離	おおむね6km以内	小学校はおおむね4km以内、中学校はおおむね6km以内	
設置手続き	市町村の条例	市町村教育委員会の議決等	

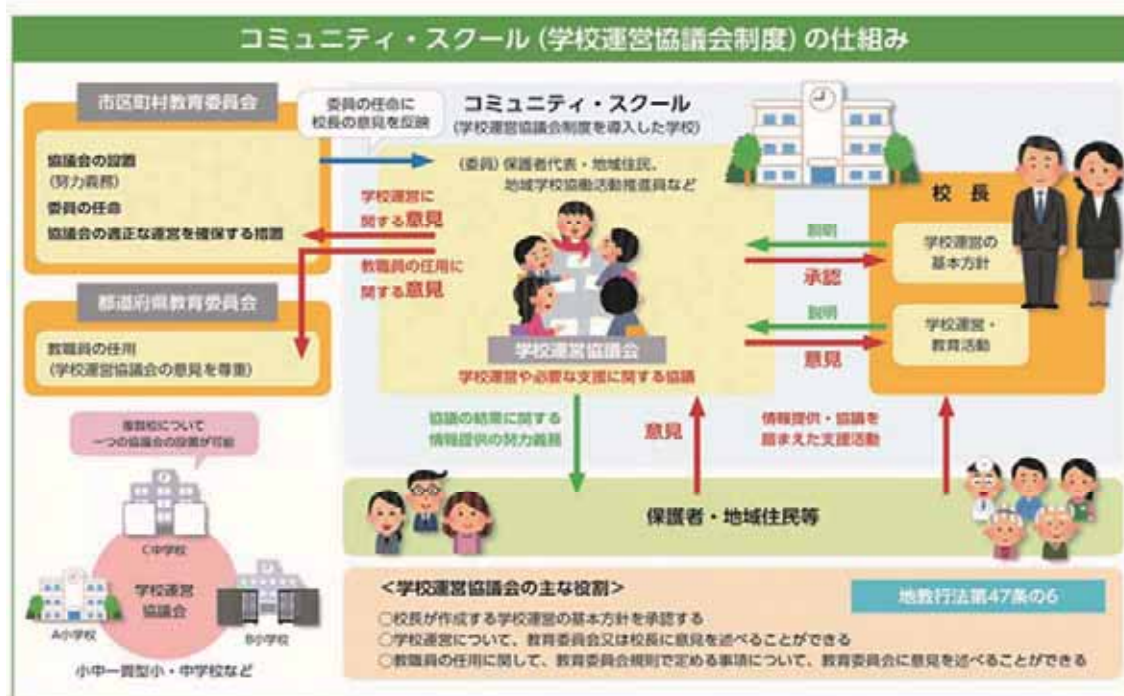
(2) 先進事例：京都市立東山泉小中学校、京都教育大学附属京都小中学校(図)

義務教育9年間を「児童生徒の将来に向けてのキャリア発達及び人間形成に向けた通過期間」と捉え、キャリア教育の視点からの基礎的汎用的能力の育成を教育課程に組み入れた9年間を貫くシラバスを作成し、社会を生き抜く力の育成を図る。



3 コミュニティ・スクール

(1) 仕組み



(2) 目指すこと



共通の目標が設定されると、お互いに前向きな姿勢で取り組むことができ、子供たちへの教育効果も大いに期待できます。

→ “**地域と学校が一体**” となって、“**役割分担**” をしながら、それぞれが“**主体的**” に取り組むので、お互いに“**達成感**” を味わうことができます。

- 日 時：平成30年10月2日（火）、4日（木）19：00～21：00
- 会 場：(榛原)文化センター、(相良)史料館
- 目的：今後、小中一貫教育へ向けて、地域との繋がりの大切さと20年後の新しい学校教育への方向性を纏める
- 目標：①牧之原市の現状と今後を知る(少子化と校舎の現状)
 ②小中一貫教育等を知る(新しい教育制度)
 ③地域住民だから出来ることを整理する(地域とのつながり)
 ④これからの学校教育のあり方をイメージ化する(10～15年後の子どもたち)
- テーマ：“10～15年後の学校教育における望ましい教育環境とは？”～ひとりひとりの意識が牧之原の子どもを育む～
- 参加者：自治会、小中学校PTA役員、教職員、幼保育園保護者、高校生（79名）

大タイトル	タイトル	意見	理由	G	数
1 将来の学校	パラダイムシフト	常識破りのことがあってもいいのでは？牧之原市ならではのオンリーワン学校	10年後すら先の見えない時代。今まで通りの価値観では化石化していきただけでは？常識を外すくらいの気持ちで、オンリーワンの学校であってほしい	6	5
	ICTによる主体的・探究的な学び	自分の明るい未来を想像・創造できる場であってほしい。		7	2
3 4 5 6 7 8 9		学校にさまざまな年代の人が関われる空間・時間をつくりたい。	園児、小学生、中学生、高校生、地域の大人まで、人との関わりが心を育むと思うから。そして、新たな発見や可能性を広げることができる。	1	3
		子どもたちと地域の人との交流を図れる場。	日頃からの地域の人へのあいさつやイベントができる場を設ける。	4	9
	交流の場 複合施設	学校が地域の交流、余暇を充実させる場。子ども、高齢者、障害者、病気の人、みんなが学べる場になってほしい。(土日使える)	子どもにとっても市民にとっても生きがいを感じられるまちになってほしいため。家族の会話のタネになる。	3	6
	多様な人との交流ができる場	つながり(人と)	いろいろな人(友達、保護者、教員、地域の方)と触れ合い、関わり合いながら多くの経験(学習面・生活面)ができる学校。	9	1
			勉強以外のことを学ぶ場 ・人と人のコミュニケーション ・思いやりの心 ・判断力、想像力、発想力、行動力	7	8
	交流の場 複合施設	フラットに楽しく話し合える場	コミュニテイスクールなど	3	9
	地域に関わること ↓ 地域を好きになる (リターン)	・将来的に自由教育になるのでは？ ・児童数の減少により地域との交流の場がなくなる。⇒農休み	・中学生⇒学力向上 ・小学生⇒学校生活の充実	2	4
10 11 12 13 14 15 16		異校種の生徒、児童、園児の交流の場(施設)	昔のように地域のいろいろな人が集まっている学び、成長し合いたい。もちろん、大人の交流の場としても。	1	6
	豊かな人間関係	幼小中高など多様な人が触れ合える学校	子どもは人と人との間で育つ	7	10
		・幼稚園・保育園間の交流があるとよい。		5	4
	幼稚園から高校生までが話し合える場	・小中連携スペースとその場を見守る人がほしい。その場で地域の人と交流ができるのもありかも。	郷土文化を知る場	5	5
		小中学校の子どもたちが交流できる場所。	学習を教え合ったり、スポーツ(部活)を一緒に遊びながらできたら。	6	6
	これからの学校	10～15年後 小学生と中学生、中学生と高校生といったような世代を超えてディスカッションできる時間を作れば、考え方の幅が広がり、1人1人の主体性につながると思う。		5	2
	つながり(人と)	学校間交流を頻繁に行う。	少子化が進んでおり、現在でもクラス替えすらない学校がある。そのことを補うため。	9	2
17 18 19	豊かな自然	子どもたちが自由に遊べる場所	・危ない、きたない、そんなことではいけない、ということができる ・違う年齢の子が集まれる。	7	8
	体を動かす体験・交流	体験できる場所。何でもいから体験できる場所がほしい。例えば木登りなど。	ダメなことをしないのではなく、けがをしらない方法などを考える場所	4	4
		ファミリーバドミントン、グランドゴルフ等スポーツで交流できる場		6	4

20	学校を集約する	20年後 小学校3校、中学校2校 学校が公民館的な機能を持つ ⇒高台に1校。	小学校と公民館を一緒にする。学校を使いたい。	1	1	
21		10～15年後の学校のイメージ 小中一貫校のモデル校	高台開発が成功すれば、各学年2クラス化	3	8	
22		1校ですべて	市街地中心の高層階の学校	通学はスクールバスで、津波・災害等から守る。	7	2
23		1校ですべて	学校が1～3校？ スクールバス。学校に自由に入出りできる。	交通網の整備は絶対！	7	3
24			学校選択制(特色ある学校づくり) 市内に3校つくる	保護者が選択できるようにする	1	3
25		これからの学校	学区制を廃止し、仮に3校に集約した場合、それぞれに個性を持たせ、選択できるようにする。		5	5
26		これからの学校	相良地区、榛原地区という旧い目線ではなく、牧之原市全体で配置を考える。		5	4
27		学校などの立地条件が心配	相良地区、榛原地区にそれぞれ、こども園、小学校、中学校が隣同士の建て方をしてほしい。	一貫校ではなく、連携という形がよい。 校舎はなるべくやや高台に、2階建て程度で避難訓練があまり必要がないように建ててほしい。	4	1
28			保幼小中高が1つにまとまった学園都市をつくる		10	1
29			相良の人たちが集まりたくなる交通環境のよいところに(バイパス付近)に学校を集める。(相良総合G)		10	2
30			牧之原に1校設置。スクールバス登校		10	3
31			小中学校の統廃合を進め、牧之原市の特色が出せる教育を行う。		1	2
32		豊かな人間関係	小中一貫教育を実現したい。	学年間をどう構成したらよいか。 けじめある学年間を望む。 交流し過ぎに注意が必要。後ろに立たれるとつらい。	7	9
33			小中一貫校を実現させる。		7	1
34			捨てていいものは何か、捨ててはいけないものは何か。箱物は(耐用年数を踏まえ)壊してください。		1	7
35	津波浸水区域を避ける	安心・安全、震災に対応できる学校を高台へ。	災害から子どもたちを守りたいから。	1	8	
36		東南海地震の可能性が高まっています。津波浸水区域にある50～60年経っている古い学校は高台の安全な地域に移すべき。	子どもの大切な命は守るべき。	2	2	
37		学校などの立地条件が心配	防災的に安全な場所への小中学校の集中化。津波等被害が予想される学校は内陸へ。 例：川崎小を榛原中学校の周辺に。将来的には小中一貫校へ。空き教室は地元の公共利用スペースとして活用。		4	2
38	地域の人が活動できる場所が校内にほしい	有効活用できる学校施設	学校と地域との垣根を低くする必要があるため。(今より)	2	4	
39		・望ましい教育環境。地域の大切さをもっと考えてほしい！生まれ育った地域をもっと知ってほしい！ ・校舎内に地域の人が活動できる場所がある。逆に、地域に子どもたちが活動できる場所・イベント等がある。		2	7	
40		たくさんの人と関わることができるスペース ・地域の人が自由に入出りできる公共施設(図書館、プール、老人ホーム等)を集める。その真ん中に学校がある。	・多様な価値観と触れ合わせたい。 ・地域の人とつながってほしい。	1	5	
41		集まる施設	地域を大切にするため、田沼塾をやれる中央公民館と小中一貫した教育、地域の人と人のつながりを持った学校		9	4
42		交流の場 複合施設	多くの人とコミュニケーションができる学校⇒子どものコミュニケーション力の向上	ICTの進化により、人と人とのコミュニケーションをとる機会が減ってきている。「考え方」にあるように、図書館、公民館、地域の人の活動スペース等と校舎が一体となっているとコミュニケーションの機会が増えるだろう。	3	8

43	高齢者と子どもが交流できる場所	公民館、コミュニティホールとして学校を開放。 そこで、共働きの家の子どもと高齢者だけで住んでいる人との交流をしたい。	・高齢者から子どもにいろいろなことを伝える。 ・昔の遊びを伝える。 ・子ども同士との交流⇒異学年の子とけんかしたり、触れ合ったりして交流。	1	4
44		長期の休みに集まれる場所をつくりたい。 共働き、核家族が増える中、児童クラブ等に通わない児童を対象に集まれる場所。そこで、地域の人たちの力を借りていろいろな体験をさせる。	小学校4～6年生の児童クラブに通わない子どもが暇を持て余してゲームばかりになってしまう。 特に夏休みは猛暑だと外でも遊べず、学校のプールも中止で行き場がない。	4	7
45		20年後の学校 ・高齢者が多くなる社会で学校は空き教室ばかり増える。 ・学校の一部を年寄りのデイサービス化する。	・子どもたちに年寄りを敬う気持ちと会議の大切さを学ばせる。 ・年寄りには生きた教材。	1	2
46	交流の場 複合施設	地域の老人の憩いの場を設ける	老人とのふれあい	3	4
47		小学校低学年の学童がたくさん入れるスペース。時間を延ばす。(学童保育) 室内に食事できる場所や遊具がある。		10	5
48		10～15年後の学校デザイン(牧之原市全体で280名) 牧之原榛原地区学校(相良にもう1校) ・幼稚園・保育園、小中学校をまとめて教育する学校をつくる。 ・その中には、地域のコミュニティセンターも存在する。 ・外国人に日本語を教育する日本語学校もある。 ・遠くから通学する学生には、スクールバスを活用する。 ・介護施設も設置する。		2	3
49	図書、幼保小中高、コミュニティ、老人ホーム、ショッピングセンター、文化センター、公園、グラウンド等集中した複合・共有施設にする	子どもが将来社会で生きていくために、教育現場に大人が立ち入る	全部一か所集中複合施設 ・保幼小中高、老人ホーム、図書館、体育館、ショッピングセンター、い〜らのようなホール、公園等	5	9
50	これからの学校	1校にまとめて公的な通学手段を整える。3校つくる案とコストの比較をして、可能性を考えてみる。 図書館と文化ホールなどの文化施設と合体させ文化ゾーンとする。		5	1
51	交流の場 複合施設	大きな図書館と学校が一緒になった施設を造る(図書館にはさまざまな学習スペースや分かれた場所がある)	子どもたちが他人に遠慮なく読書できるといい。	3	5
52		図書館を中心に、周りに小学校、中学校、高校、相良城(史料館)がある。史料館は学び直し学校として公民館的に活用。旧市庁舎は1階は老人ホーム・ケアセンター、2階は保育園。		4	5
53		校舎内にコミュニティの場所をつくる。図書館、総合グラウンドを併せる。		10	9
54		学校に近い場所に大きな図書館	・本から学べることが多いから。 ・地域の人も入れるし、子どもたちも入れるので、そこでコミュニケーションが取れる。 ・勉強ができるスペースも…。	4	7
55	図書による学び	図書室(勉強スペース)今よりもたくさんの本と出会いがほしい	本から学ぶものが多いから。想像力、読解力など	7	6
56		休日でも自由に利用できる学校 ・図書館・体育館・グラウンド		10	6
57		多目的な図書館・図書室等を充実してほしい。(学校内)		10	7
58	施設	地域の人々がさまざまな目的やイベントで集まれるような複合施設をつくってほしい(例:鳥田ローズアリーナ)		5	10

59	総合小中学校で学び、特色ある教育は地域のサテライト施設で行う		コミュニティ総合小中学校をつくる！ 基本は総合小中学校で学び、地域ごとの特色ある教育は地域の学校で学ぶ。 (相良：塩づくり・田沼、菅山：くり、萩間：自然薯、牧之原：自然薯・お茶、川崎：静波海岸、勝間田：レタス・田んぼ、坂小：みかん・仲よし学校)	人が少なくなっても小学校の校舎は残して、地域のよさを学べる場とする。	4	1
60		ICTによる主体的・探究的な学び	少子時代に入るが、ICT等の時代に即した施設で教育。本校は、資本を集中し、社会の一部として機能させ、地域との交流はサテライト施設があればよいのではないかと。	金がない、田舎だからとあきらめてしまえば、子どもたちの未来の選択を狭めかねない。	7	3
61	休日も子どもたちが遊んだり、勉強したりできる場所	学校とは別に	学校の近くに1個は勉強にも励めて、子どもが安全に遊ぶことができるスペースが必要。	図書館だけだと確かにゆっくり本を読んだり、勉強はできるが、なかなかかはかどらないし、集中できない。遊びたい。親なら自分の子どもが騒いできて迷惑をかけるしまうなどということもあるかも。学校だけだと教師が目が届かない場所でトラブルなどが起きてしまう可能性も。	4	3
62			休日等に子どもたちが遊べる学校にしてほしい。		10	8
63			世界とつながる学校	牧之原市にいながらにして世界とつながることができる。いろいろな価値観に触れることで自分の生き方を考える。	3	10
64			世界につながる教育。言語、人との関わり	人口減少に伴い、視野を広げる必要性。いろいろな人や機会に触れる機会。	2	6
65		ICTによる主体的・探究的な学び	教室だけでなく、家庭でも公共施設でも学べるICT環境	オンラインで先端研究や企業とつながる	7	5
66	ICT環境		インターネットをつかえる	授業で分からないことを調べたいから。調べることができれば授業で困らない。	2	5
67		グローバル	牧之原にいながら世界とつながる	牧之原の自然を体験しながら、グローバルなコミュニケーションが取れる	3	3
68		施設	各教室Wi-Fi完備		5	11
69		牧之原大好き！⇒発信	人・もの・こと 新しいシステムに対応する（ICTの導入・活用）	電子黒板・教科書・タブレット等世の中は常に進化・変化していく。地方は動向は知っていても対応は遅れがち。なるべく世の中を反映させていく。	8	8
70	勉強は家庭、学校は遊んだり対話する場所になるのでは	集まる施設	学校は、10～15年後存続するのか。AIが進み、家庭で学習する。学校は週1くらい集まり、コミュニケーションづくりと対話の場所になるのではないかと。通学したら楽しい場所が学校になればいいし、人員が減っても週1なので広い校舎もいらぬ。ただし、広い運動場や体育館は必要。思い切り遊べる場所づくりの学校。		9	5
71			楽しい場所、対話、遊べるスペース ⇒人間力 勉強は家庭		9	6
72			市民プールを土日有料開放		4	3
73	プール		学生以外も使えるプール	地元のコミュニケーションの場となる	4	6
74			プールや図書館などの施設の市営化	管理を外部組織にすることで教師負担を減らす。施設が充実する。	6	10
75		施設	全天候型グラウンド	運動会等の行事で、雨天で土日の動きが左右される。せっかく新校舎になるときはグラウンドまで配慮を！	5	12
76	屋外施設		野球場がほしい		10	10
77			もし学校が移転するなら跡地に牧之原の人が集まりたくなるような場所を！ 芝のサッカーグラウンドをつくる。		10	11

78		地域との関わり	あたたかな給食を食べることができる		5	9
79		子どもが将来社会で生きていくために、教育現場に大人が立ち入る	・クラス替えて新しい友達との出会いを。 ・農業等、海のこと、工場のことなど教えてくれる人がいるといい。地域を小学校区でなく、市全体で捉えられるといい。	・大勢の子どもがいて、大勢の大人に囲まれた社会が学校にあるといい。 ・一人の子どもに大勢の大人が後ろにいてくれるといい。(関わる)	5	8
80		単学級はやめて	中学校は2つ。(相良中・榛原中) 牧中は申し訳ありません。小学校は4つ(各中学校に2つの小学校)	小学校の単学級化をなくすことで、たくさんの人間関係を学ぶことができる	7	4
81		単学級はやめて	クラス替えをして新しい友達をつくれる学校	ずっと一緒では、新しい友達につくれない	7	5
82	学級数	単学級はやめて	1学年1クラスがずっと続くとした場合、同じ環境で過ごすことにメリットもあればデメリットもあると思う。 一緒にいる友達や学びたいものが選択できなくなってしまったら、すごく窮屈だと思う。 そうなると市内・県外へ進学・就職したい人が増えるかもしれない。自分で選択していける教育環境があればよいと思う。		7	6
83			いろいろな人たちと関わるができる学校になってほしい	子どもたちのコミュニケーション能力を高めたい。小さい学校だとコミュニケーションの幅が狭くなってしまったため、地域の人たちと関わる場も必要	1	4
84			生徒数を補うためにも、いろいろな文化を持った人たちが(外国人)が交流できる場があったらいいと思う。	コミュニケーション能力が高められる。	1	5
85			生徒一人一人に目が届く学校	いじめ、不登校が年々増えてきている。集約してマンモス校をつくるのではなく、ほどよい人数にしてほしい。	2	1
86		これからの学校	1学級20~24人程度。世界一の学校、フィンランドの教育を参考。	・子ども一人一人丁寧な指導がいきわたる人数 ・大人数だと、誰かが言うだろう、やるだろうの意識が人間として働く。少数なことで「自分がやらなければ！」の意識が働く。	5	6
87	プログラム	子どもが将来社会で生きていくために、教育現場に大人が立ち入る	子どもがこれからの社会で生きていくため、社会からのフィードバックをできる限り子どもに与えたいので、大人の職業体験、職業の知恵、小中学生に情報を与える機会や仕組み、プログラムをつくりたい。		5	7
88		つながり(地域と)	地域と密着した活動を9年間の学びの中で必ず体験させる。カリキュラムを取り入れる。(小中一貫・キャリア教育)	牧之原市のもっとも優れた特色ある教育は、地域との連携(つながり)なので、それを市内のどの子にも体験・経験させたいから。	9	3
89		ICTによる主体的・探究的な学び	学習者主体の学び。企業や校種の垣根なく。	自分の興味を探究できる学校。(高校との連携・NPOや企業との連携)	7	1

90	地域力	地元企業の力	地域とは住民だけでなく、地元の企業も含む。市の未来人材育成の視点で。	6	4
91		地域の人が先生となって、子どもと共に活動できる学習内容。 例：生産活動、地域のよさを知るなど		3	6
92	地域との関わり	地域の人に地域のことを教えてもらえる学校	地域のよさは地域の人から直接話を聞いて初めて実感でき地域を好きになれる。	5	8
93	地域力	地域の文化を守り、安心安全で文化の香りを創出する学校	今のままでは少子化がどんどん進んでしまう。市の施策として子育ての時期に牧之原市に住みたいと思える具体をもっと出してほしい。統合することがよいことは思わない。地域には地域のよさがあり、そのよさを地域と学校が共有することが大切。	6	1
94	地域力	地域との関わりを残す	地域の歴史・文化を学ぶことがアイデンティティや地域愛につながる。	6	2
95	牧之原大好き！⇒発信	学校の統廃合は時代の流れかな。統合後も地域とのつながりを忘れない教育を。地域の組織の統合とならないように。理想と現実の差があっては困るのでは…。		8	4
96	牧之原大好き！⇒発信	集約された学校の基本目標を学校だけでなく、地域全体で共有化していく必要があるのでは。		8	5
97	牧之原大好き！⇒発信	人・もの・こと 牧之原市でしかできない学びがある。各学校で行われている特色ある教育がなくなることなく、もっと地域がより参入し学校がより開放的になることで深まることを期待。	牧之原市っていいな～と思う子を育てていきたい。	8	6
98	地域が学校に関わり体験できる場をつくる	人・もの・こと 牧之原市を愛する人(郷土人)【地方】、中央のことをよく知る物知りな人【最先端】、地域に還元している人	子どもの将来のお手本になるような人が学びに関することで、牧之原市の学びや将来につなげる	8	7
99	地域力	地域の人たちと一緒に遊び心いっぱいの学校	学校は子どもたちだけの学び場ではない。地域と共にたくさんの方が関わり、学び合える場でありたい。その中で子どもたちが自己実現させていけるような学校でありたい。それが、社会に開かれた学校では？	6	3
100		・地域の人と交流できる場 ・農産業の手伝い。自然を通してコミュニケーションできる場	校内だけでは足りない体験、交流ができる	1	1
101		①読み聞かせ ②野菜を育てる	①戦争の話など聴きたい。 ②おじいちゃん、おばあちゃんに教えてもらう。	3	3
102		・絵本の読み聞かせのボランティアはずっと必要だと思う。		5	3
103		勝小が誇る「きりり農園」の継続。	学校の人たちと地域の人たちとで、一緒にとうもろこし、落花生、夏野菜などを作って、収穫を祝い、料理していただくことを続けていきたい。食に関することはもちろん、自然の恵み、感謝の気持ち、そして地域や学校へ愛着を持たせたい。	3	4
104		・田植えから刈取り、もちつきまで農作業の仕組み ・お茶のできる仕組み等地域との関わり	地域の事業は大人になっても覚えている	4	5
105		もちつき、米作りから教えたい。しめ縄づくりもできる。	新しい材質等で生産されているさまざまなものを自分の手で加工し、その物づくりの手法を残したい。	5	1
106		・地域の人との野菜づくり ・地域の場所を使つての通学合宿 ・中学生と小学生の交流の場 ・自分の意見を言えるようになる授業があるとよい。		5	2

107		一人の子どもに大勢の大人が関わって育ててもらいたい。 米作り、野菜作り、自動車、PC、外国語学の先生、歴史等		7	7	
108	地域との関わり	地域の人のご厚意で日頃体験できないことをしてもらえる環境を残したい。	・畑を借りて、じゃがいも・さつまいも等の収穫。 ・幼稚園内にあるはたんぼや畑を使っての作業。(土ならし等も含む) ・地域の人たちの協力で自分たちがつくったじゃがいもなどを自分たちでいただく。 ・子どもの遊びもできる	5	7	
109	地域が学校に関わり体験できる場をつくる	小学校で農業体験、中学校で職業体験を計画的に行う。	・地域の特産物を知り、将来の可能性を考える機会。 ・新たな職業にも目を向けさせたい。	6	1	
110		職場体験+農業体験・地域清掃	牧之原市特有の仕事(魅力)を伝える。地元の良いところ。 外に出かけているいろいろなものを見る・知る。場所へ行く。	6	2	
111	つなげていく	牧之原ならではの農業、産業、自然をたくさん体験してほしい。	自宅や塾での学習等、知識を身につけるだけではなく、実際の体験ができるとよい。家庭ではなかなか体験が難しいため。	3	1	
112	つなげていく	住んでいる地域の特色ある体験	地元のよさを知る。資源を知る。継続的にやっていく。	3	2	
113	軒先運動の継続	地域に関わること ↓ 地域を守る ↓ 地域を好きになる (リターン)	軒先運動を続けたい。	学区が広がっても、子どもたちは毎日登下校する。安全対策は必要。(いつになっても)	2	3
114			子どもたちの登下校の見守りを続けてほしい。朝や帰りに通学路に立って子どもたちを見守り、横断歩道を渡る時は旗をもっていただく。	教員が見切れない登下校の様子を伝えてくれる。子どもたちが安全にと下校できる。	4	8
115	地域が主体の学び	パラダイムシフト	市民のパラダイムシフト	固定概念を無くし、市民、地域が子どもを育てる仕組みが必要	6	6
116			子どもの社会力が育つ場づくり 土日のあり方を具体的に考えたい。教育課程と地域のカ、人、文化をどうかかわらせるか。	学校週5日制発足時は、学校と社会、地域の連携が叫ばれたが、ほぼ実現できなかったため、今取り戻したい。	6	7
117			地域の行事(いいものは残したい) ・お祭り・区民大会・校内運動会(住民参加)・スポーツ少年団		3	5
118			地域全体で子どもを育てる仕組み ・防災訓練・祭・キャリア教育・まちはのほら	まずは市民の意識改革(パラダイムシフト) 学力だけでなく、人間力を育てるためには、多様な考えが必要だから。	4	6
119			高尾山の仲よし学校	1～6年生の縦割り。コミュニケーションでつながっている。	4	4
120			地域での取組。 地域が主体となることは考えないでほしい。(学校との目標化)		3	1
121			地域の負担を考えて学校をつくる。		3	2
122			勝間田地区の行事 (勝間田城址祭、みやまつじ祭、ゆうゆうランドの活用、通学合宿、みやま農園)	地域の伝統、歴史の勉強	6	3
123	自治会活動	自治会残す活動	自治会は、小学校区の10区でこれまでの歴史・文化・伝統を大切に今まで通り、次回は10区で活動する。	9	7	
124	さまざまな教育	人間力	学力・専門性のある学校 空港を利用した学校		6	9
125			学校管理に地域雇用を増やす		10	4
126		地域に関わること ↓ 地域を守る	向こう三軒両隣が分かる教育		2	1
127		地域を好きになる (リターン)	全国区に出て、故郷に戻る気持ちを育成		2	2
128			都会と同じような教育を受けられる環境。	牧之原市では、「質の高い教育ができない」「就職できない」という理由ですばらしい人材を流出したくないから。	1	6
129		子どもたちが夢を持てる場所。本物に触れる。	主体性、意欲。 学ぶ必要感、学ぶ喜びを感じる。	2	9	

130	さまざまな教育	人間力	コミュニケーション力の向上	現代では、スマートフォン、SNSなどによって対人的な関わりが減っているから。	6	7
131		人間力	主体性、積極性のある人材の育成	地域との交流に積極的に参加する	6	8
132		今後の教育	学校生活の中で、一つのことばに時間を掛け、努力して達成感を味わえるような行事(イベント)がほしい。	本当に「身のある教育」とは何か？学力をつける場ではない。体験が大事。子どものための教育とは、ルールを敷くことなのか、たくさんの体験を積むことなのか？	2	6
133		未来の予想が実現したように考えて行くことも必要	10～15年後の学校 ①少子化により人数が10人程度になっても地域のみなさんが協力して人間形成ができるような学校(静岡市大川小のような) ②親孝行できる教育(地域及び牧之原市の人口減少に歯止めを) ③英語教育は高学年から始めてほしい(日本語を大切に) ④少子化に対する対策を考えていただきたい。 ⑤小中一貫の前に幼保一貫教育の徹底。		8	9
134		これからの学校	小学校から中学校までの小中一貫教育は無理な感じがします。6～8歳、12～15歳は子どもと大人の差。中高一貫の方が合理的。ただし、高校は義務教育ではないのが…。		5	3
135		今後の教育	学校の中で「公平」を作りだす手立てがたくさんほしい。 ・外国人のサポート(バイリンガル) ・支援を必要とする子のサポート(支援員)等	これからの社会のキーワードは「共に生きる」ことではないか。年齢構成の単純な変化だけではなく、その人たちが抱えているさまざまな「困り感」「事情」も変わってきている。多様な人を受け入れるコミュニティと少しでも同じ立場で接することができる社会をつくりたい。	2	5
136		誰でも通える学校。幼、小、中、高など決めずに一生学べる。		多様性。学びは大学までではない。	3	7
137		交流の場 複合施設	誰でも学び合える学校	知識だけでなく、いろいろな人の知恵をお互いに学び合う。卒業がない。いつでも学び直せる。	3	7
138			学びつつ楽しいなを感じる学校	新しいことを知る喜びを持たせる学校教育※学校はなくさない。	3	9
139			学校に行くと楽しいことがある。 ・今日は体育がある。 ・友達と話すのが楽しい等	子どもたちが学校へ行く意義が持てることが大事。勉強することも大事だが、それ以外のことも重要な時代になっているのかもしれない。	7	9
140		みんなで楽しく!! 年代を超えた交流	みんなが集まって楽しく遊べる学校	楽しいことは能力を伸ばしてくれる。保、小、中、高校、住民が集うことができる学校	8	1
141			小中高合同の学園祭	違う世代との交流を図る	8	2
142			各地域出身の生徒で祭を運営する	創造力、アイデア、団体行動、交渉力を身につけられる。優秀な地域は表彰される。	8	3
143			子どもがつくったものを、「こども道の駅」で売る。	キャリア教育	4	2
144			・コミュニケーションを取るのが苦手な子、軽い発達障害がある子には細やかな定期サポートをしてくれる人が必要。 ・異年齢での交流を定期的に。		5	6
145			いつでもくじけない心が必要。	これがあれば何でもできる。最後にはこれで決まる。	6	5
146		ICTによる主体的・探究的な学び	地域と学校が意見を共有して進めるときに、子どもの権利を代弁する者は必ずほしい。		7	4
147			子どもたちが出したアイデアをどれだけ地域が吸い上げられるか！		2	8
148		豊かな自然	海を利用した授業	海の怖さ、楽しさを教える。先生が大変だけど、ライブサーバー監視のもと。危険を知ること大事。	7	7
149	その他	庁舎は2つ足りない。1つにしてください。		1	9	